

浄土

五月号



法然上人鑽仰会

昭和十四年五月十七日 第三卷第五号
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受認許証)第三五二号
昭和四十二年四月二十五日 印刷 昭和四十二年五月一日 発行

第三十三卷 第五号

光 無 壽 量

貫達五

無量光壽

阿川貫達

(大正大学元教授
浄土寺住職)

無量壽、無量光は阿弥

陀如来を意味します。

われわれも又無量壽無

量光でありたいのです

がなかなか難しいこと

です。いつも阿弥陀

如来とともにあるを喜

び、往生極楽を願って

止みません。

表紙「静物」松濤達文画

慈母観音

..... 山本禄瑞 (2)

ゆとりある生活 横井正道 (4)

お歌をいただく (7)

名士訪問 阿川貫達上人 (8)

歴史夜話 仇討の倫理

..... 鈴木成元 (12)

新興教団探訪④ 孝道教団

..... 藤井正雄 (14)

お茶をおいしく 新茶のよろこび

..... 三浦純亭 (18)

合 掌

..... 合田微雪 (20)

浄土宗のおしえ⑥ 本願について

..... 柴田哲彦 (22)

元和偃武

..... 鶴田湛泉 (25)

読者の声 正法と末法 (28)

連続
絵話 みんなの法然さま・配所への旅

..... 高橋良和 (30)

法然上人御歌

池のみづ人のこころに似たりけり
にぎりすむことさだめなければ



山 本 禄 瑞

千葉県安房郡富浦町と云えば「房州びわ」の産地として知られている。最近はや海水の清潔な点で夏ともなれば都人士の海水浴場として有名な場所となった。この地に千葉県立富浦学園と云う児童福祉法による養護施設があつて色々な運命をもつ薄幸な児童がいつも百余名起居している。

この学園は大正十四年十月に完成し日赤の千葉支部が経営して体質の虚弱な児童を収容し、健康増進を目的として特別な教育を施す施設として発足した。当時医学博士和田正系先生が園長をつとめられ卒業生も実に五千余名に及ぶ大きな功績を挙げられた。この由緒ある建物が終戦後児童福祉法施行に伴つて千葉に移管され、昭和二十四年四月以降現在の業務が実施されている。敷地面積三千五百余坪、その中に鉄筋コンクリート平家建、洋館式二五三十五坪、又庭内の松林の中に児童の宿泊施設を始め食堂炊事場、浴場等三百六十坪余の設備が児童の趣好を取入れて建設されている。さて、この広い食堂の一隅に幼児を抱いた観音さまの尊像が祠られている。作者は文展審査委員の国方林三先生で、開眼は大本山増上寺の大島徹水僧正台下である。私は昭和三十二年六月以来最近までこの園の学園長を拝命し、毎月収容児童の教育に生活指導にと人づくりの事に励まして頂いた。

県立と云う公的な経営にある当学園に、こうした観音さまが安置されていると云うことは実に珍しいことである。

出勤して先ずこの観音さまに合掌することが私の園務につく第一の日課となつてゐることも本当に有難く、喜しく、又尊くもある。今日一日幸ち薄き児等を護念し給えと祈る私の心の中には何の不純もなく、名利もなく、我慾もない、清浄な本心が開顯される思いである。私のこうした行が次第に他の職員にも及んで一言も何も云つた覚えはないのに皆んながお花を飾りお燈明をあげるようになって来た。子供達もこれに倣つてお水をあげたり拝むようになった。或る日何の気なしに宿舍及び食堂を巡回した処一人の女の子が、観音さまの前に手について何か

慈母觀音

謝っているような姿で頭を下げている。氣をそらすのも可愛想だと思い、そつと担任の先生に、その訳を質した処、「園長先生、あの子は女のくせに人のものばかり欲しがって盜癖が治らないから、今觀音様に謝まらせているのです」と云う答だった。そこで私は静かに觀音さまにお線香を上げて「ねえT子ちゃん、どうしたの、ここへお座り」と云い、担任の先生が何ぜ觀音さまに謝れと云われたか、人の物に手をつけることの悪い理由、人間は信用をうけることが大切であること、一度やった失敗は大人になっても云われなければならないこと等色々と話合い、二度とこうしたことをやらないと觀音様へお約束することとなった。そして黒い糸を觀音さまのお手に結び同じ糸を少女の手首に結んだ。「さあこうしておけば觀音さまは必ず、あなたから人の物を盗ると云う病氣を治して下さるよ」と云いきかせて一先ず解決した。その後は本当に忘れたように盜癖がなくなった。信仰と云うことに縁のうすい先生方も「本當に不思議だわね。これがきつと御利益と云うんだわ」などと話し合っていた。少女も段々成長し自我意識が確立するとともに自立性を身につけて来た。本人の手首に結ばれた糸は、もうとくすり切れてしまったが觀音さまのお手の糸はそのままだった。この子も卒業して立派に就職することが出来た。そして丸三年一生懸命お勤めして心の故郷である学園へ休暇を頂いて帰って来た。皆な久々に会う喜びを頒ち合つて懐かしい園内を今更のように見て回つた。

その内に改つた態度で園長室の私の所へ来て、「園長先生、あの日からもう三年、私は決して他人の物に手をつけたことはありません。一生私は觀音さまとお約束してあります。御主人もお前は正直でよい子だと、ほめて下さいました。決して悪いことはしませんから、觀音さまの手の糸を解いて上げて下さい」と涙乍ら訴えたのです。「ああ、そうだったね。觀音さまのお手を縛るなんて、本當に申訳けがなかった。貴女が本當に立派な人になったのだから、おはずししましょうね」と早速く切り取つて上げることが出来た。少女は本當に嬉しそうに御宝前に額づいて合掌していた姿が眼にうるむ思いでした。

ゆとりある生活

横井正道



新聞の諸書欄に、「かあちゃんと十一人の子ども」という本が紹介されていた。書いた人は、吉田とらさんという明治末年に生まれた主婦である。伊豆半島の西海岸の部落に生まれ、十四才で結婚していらい、十一人の子どもを生み、それぞれ立派に育てあげた。百姓と蚕業をしながら、牛乳屋と肥料問屋を経営しているという村の小さな商人の家庭であるが、労働もはげしい、経済的にもけっして楽ではない。そのなかで、つぎにつぎに生まれる六男五女の子どもを、すくすくと育てあげた記録である。

十一人の子どもたちが、母親のことを、それぞれ「ぐちひとつこほしたことがないかあちゃん」「一回も子どもを叱ったことがない」「どうちゃんは個性の強い人間だが、無限に角があつて、円にならない男です。かあちゃんの柔と、とうちゃんの剛がうまく溶け合つて、家庭になんの波乱もおこりませんでした」等の紹介がしてあつた。

もうそれぞれ、就職したり、嫁いだりして幸福なくらしをしている上の子どもと、まだ家にいて勉強中の子どもとが、こもこもと母親を心から尊敬している様子が感じとることができた。

平凡な主婦の半生の子育ての記録の紹介であつたが、なに

かしら、わたしの心を打つものがあつた。なぜだろうか。

「勉強、勉強」とか「いい学校」になどとひとことも子どもにいったことのない母親のもので、なぜ、十一人の子どもが、頭もよく、身体も丈夫で、大学まで進学でき、愛情ゆたかな性格に育つて、しかも、それぞれが個性のある人生を前進していくことができたのであろうか。

その秘密は、この母親の生き方にある。家業も家事も忙しい。雇い人もいるので、一日に三回何升という汁をつくる。子どものことをベタベタとかまってるなんかいられない。子どもがケガをしても、ありあわせの薬をつけておけ、といった程度である。

しかし、そんな多忙のなかで、この母親はつぎのことを貫いている。

一つは、多忙であるとかく人間は、感情的になりがちである。子どもにもグチをこぼしたり、八つあたりをするものである。この母親は、これをしたことがない。朝、子どもは、体操用のハチマキが見つからないと泣き、学校へもってゆくものを準備してないといって、駄々をこねる。ふつうだったなら、「準備していないお前が悪い」といって叱る。しかし、この母親は、一人ひとりの子どもに、その場で手をかけ、言葉をそえ、てきばきと処理してやるのである。大きく

なる頃には、もう自分で自分の始末をしっかりするようになっている。手をかけてやるのが成功したのではなく、子どもの感情と一緒にあって、泣きことをいわなかった。

つまり、どんなに忙しくても、親の「ゆとり」を失わなかったということである。

つぎに、母親の強さは、父親つまり、亭主に負うところが大きい。この記録を書いた母親は夫を尊敬し、心から信頼しているということである。田舎の人だから、都会の人のように「愛している」というような言葉は使わないが、しかし、子どもに対しても、夫に対する信頼の情愛を臆面なく、語ってきかせるといふのである。



最近、このような、いわば、たくましい母親の像をみるとが少なくなくなったような気がする。たえず子どもに連れそって、保護過乗となったり、また、子どもの成績向上のために、学校へ試験答案用紙を盗みに入つたというような、ゆきすぎた教育ママはあっても、親としての、心のゆとりをもつて、子どもをしつける情操ゆたかな母親をみることができにくくなった。

そもそも、親が子を「育てる」ということは、いかなるこ

とであらうか。一説によると、守ってやることへ保護V 教
えてやることへ教育V 自分で判断することへ自立Vである
といわれる。すなわち、子ども自身が、自分で判断して人生
を渡っていかれるようにすることであるというのである。

それが、親が子どもにあたえる「教育」というものである。

そうすると、親が子どもにあたえる教育、すなわち家庭教育
は、学校の勉強だけをさせるものであると、信じてうたが
われない、いわゆるママたちは、ほんとうの、家庭教育の意味
をわすれている、ということになる。

学校教育でおこなうことのできない、大切な面を、家庭教
育でしつける必要がある。

それは、なんであらうか。

ずばりいうならば、人間のもっとも大事な、心のゆとり
と、人を信ずるという、豊かな人間の情愛を育てる、という
ことである。

それは、なにより、現代の生活に欠如しているものであ
り、今後ますます、その傾向がよくなるのではなからう
か。

物質を中心に、機械文明の歯車のなかでピンとはりつめた
生活している、現代人が、人間性を回復するために、どうし

ても、考えなければならぬ問題である。

そのことを、考えさせてくれるのは、信仰であり、とく
に、法然上人のとかれた、お念仏の道が、そのことを如実に
示しているのである。

むかし、熱心なお念仏の信者の方がおられた。なににつけ
ても南無阿弥陀仏を口ずさんで日々を暮らしていた。ある日、
いつものように、お念仏をとえながら歩いていると、行き
ずりに一人のひとが、「ああ、また空念仏か」と嘲ったので
ある。すると、そのお念仏の信者は、踵をかえして、そのひ
とのあと追った、そばにいた人が、「そんなに怒らないでも
よいではないか」というと、「いや、怒るところではない。
お礼が申したくて、あとを追いました。空念仏とは、よくも
言うてくださった。もしも、わたしごとき愚かなものが申す
念仏が、てがらになるならどう致しませう。なにも残らぬ
から念仏ということをお教えくださった。どこに善知識が
あることやら。誠に勿体ないこと、お礼を申させていただ
きたい」といって、厚く礼をのべたいという。

お念仏の意味をあらわす、わすれがたい対話である。現代
人は、この対話を、低俗なものとして一笑に付すであらうか
人間が豊かに生きる、ということは、知識でも学問でもない
心の問題である。

御歌をいただく

池のみづ人のころに似たりけり

にこりすむことさだめなければ

(勸修御伝第三十)

「さだめ」はきまり、秩序ということです。

池の水は、まことに人の心に似ています。

なぜなら池の水は濁ったかと思えばまもなく澄むし、澄んだかと思えばまた濁るというように、少しもきまりがないからであります。

しかし池の水は、濁っている時より澄んでいる時の方が多いのですが、人の心はめったに澄むことがなくて大いの場合には濁っていることを恥かしく思います。心はコロコロがって少しも静止していないから、この名があるといいますが、法然上人は心を枝から枝に飛びまわって少しも停っていない猿に喩えて次のように申されました。

「凡夫の心は物にしたがひてうつりやよし。たとふるにさるのごとし。まことに散乱してうごきやすく、一心しづまりがたし」

人の心を猿にたとえるのに、六窓一猿とい

う言葉があります。六窓とは六つの窓を持つ部屋のこと、人体のことです。なぜ六つの窓があるかというと、眼耳鼻舌身意という六つの感覚の入り口を持っているからであります。そして次々と送り込まれてくる妄念に応接して、一匹の猿が狂奔しているという意味であります。

ご法語にあるように、人の心は決して一カ所に停止していません。停止させようとしてもできない相談であります。これが人としての実態であって、この事実を無視することはできません。従ってこうした事実を肯定した上で、の信仰でなければ、いわゆる凡夫が救われる信仰になりえません。次のご法語は、このことを仰せられています。

「念仏のとき悪業のおもはるる事は、一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念仏せば、ゆめゆめさはりとなるべからず」

お念仏は凡夫のための信仰であります。凡夫は自分をかざろうとせず、そのままの姿をみつめてゆき、偽らざる自覚を持ってゆくところに、阿弥陀さまの本願のありがたさが

思われてお念仏の信仰が生じます。お念仏を唱えながらも尚かつ妄念を生じますが、これをそのまま知ってお念仏を続けてゆくところに凡夫がお念仏の救いをいただけるわががあるのであります。

それなら凡夫は、感覚の渦の中に巻き込まれたままで安閑としていてよいのでしょいか。凡夫だからといって、妄念のとりこになったままで安住してよいわけはありません。凡夫の実際の姿を自覚することは、その姿に満足することではありません。

次にもう一つ法語をあげます。

「まづ名号を唱えよ。名号の徳として妄念自ら止み、願心自ら生ずる也。いかにいはんや本願の元意は乱心止み難き者を化せんがため也。妄念止み難きにつきて、一向に本願仰ぐべく、散乱静まり難きに付ても一向に名号を唱ふべき也」

凡夫は已が実態を知る者であります。この自覚が深まるとお念仏を唱えるようになります。お念仏を唱えれば妄念は自然と少なくなります。これは阿弥陀さまの本願の力によるところであります。

(村瀬秀雄)

(問)(訪)(士)(名)



赤坂浄土寺住職

阿川貫達上人



念仏の上人

地下鉄赤坂見付を降りて、一ツ木坂を登って行くと、一ツ木通りにつき当る。何ということなしに、赤坂の臭いが、あたりに充満する。近代化された歓楽街という感じである。一ツ木通りに出たたん、人力車を見た。あで姿の芸伎が丁度来るところであった。「流石は赤坂だ」

そんな感情をいだきながらTBS放送局の方に歩いて行くと、大きな赤ちょうちんが門前に一対立てられていた。これが、浄土寺の人口である。

広い門前通りの突き当りに、コンクリートの本堂がある。阿弥陀堂形式の落ち着いた感じである。

「あれは昭和三十六年に建てたものでしてね。大震災では焼けなかった前の本堂も、戦災では焼けてしまいました。今の本堂

を建てた頃は、未だあたりを圧していたのですがね」

阿川貫達上人は、静かに過去を振り返りつつ語られた。

念仏の上人、信念の念仏者とかめられる阿川上人を、春とはいえ寒々とした日の夕方訪問した。

「寒いですから、さあこちらへ」

火鉢には、炭火が一杯に燃え、ガスストーブも輝いていた。温い心遣いが、ここにあった。

「名士訪問などと、とんでもないことです、恐縮の至りでございます」

いかにも恐縮される上人の言葉や態度が、自然に受けとれるところにも、上人の人格があらわれている。「念仏と一枚になった生活」そうしたもの、兼ねてから上人に感じていた記者は、珠数をつまぐりつまぐり話される一語一語を、感銘深く聞いていた。

「柳や」の愛称

「先生のご出身は」

「はい、私は横浜の米穀商の息子でござ

いましてね、父が派手な人で、とうとう倒産してしましましてね、祖母のはからいで、寺に入るようになりました」

なんでも、祖母に当る方は立派な人で、破産してちりじりになるなら、寺に入れて坊さんにしたらという事で、八王寺の極楽寺に縁をつたって、入寺したとか。

「八才の時でございましてね。なかなか厳しい師匠でございました。阿川貫珠と申しました。冬でも足袋ははかせず、朝早くから寺仕事をさせ、お経や、読み書きを教わりました。それでもね、柳や柳やと言って、私を可愛がってくれました。私の幼名は長谷川柳之助と言ったものですから」

そう言って、上人は、しばし目をつぶられた。

「とても立派な師匠でした。私が今日あるのは、この師匠のお力の外はありません。有難いことです。本当によい師匠でした」

約一時間程、記者は対談をしたのである

が「有難い」という言葉と、師匠への讃辞が幾度も出てきた。

師匠の背中を流す

「別によい着物を着せてくれたわけでもなく、淋しいこともありましたが、今にして思うと、あれでよかったのです。あれでなければ、今の私はなかったでしょう」

今と違って、昔は小僧になるものも多かった。特に在家から小僧になったものが多い。貫珠上人は妻も子供もなく、弟子を幾人か持っておられた。昔の寺は、それ位の事ができたのである。

「風呂に入った時は必ず背中を流してさしあげましたし、夏は暑いと言って、団扇であおいであげたりして、師弟の間柄などは、大へんよいものですね。この頃では、こんなこと、とてもできませんがね」

こうした感懐の中には、今の仏教人の物足りなさ、何かが欠けているのではないかという、不満もあるように伺った。

「学校はどうなさったのですか」

「はい、小学校に編入試験を受けましてね、多分、四年生かに入ってもらいました」

小学校の編入試験など、今では一寸考えられないことだけに、興味深いものがあった。明治二十三年のお生れであるというから、今年七十五才。思えば随分、昔の話である。

教校から芝中・宗教大学へ

「あの当時は、高等小学校というのがありましてね。そこを出たのですが、お蔭様で、成績もよかったので、教校に入れて頂くことになりましたね」

そんなわけで、教校に入られたのであるが、やがて、それが芝中学校となった為、ここに替わることになった。

「八王子から通われたんですか」

「いや、とんでもございません。二代將軍のお霊屋が最勝院という寺でしてね、そこに教校時代は随身していました。芝中の時は寄宿舎にいました」

その頃の学友には、伊達保美、小島密成師などがいたという。それから、上人は宗教大学（今の大正大学の前身）に学ばれたわけである。

「加藤秀旭という宗乗学者がおりましてね、大変可愛がってもらいました。それで卒業してからも、内地留學生として秀旭師について宗乗をやりました。私が宗乗で一生を終ることになったのも、この先生の指導のお蔭で、有難いことでした。」

またここで、有難いという言葉がでてきた。

「その時書いた研究論文が『四十八願の研究』というのでした。」

「それは、何かにご発表でも」

「いや、未だいたしておりません。何時か時機をみてと思ひながら、未だ果さずにあります」

こうした機縁で、加藤教授の逝去後、大正大学の講師となり、選択集を講義されることになった由。

「あれは、大正十四年頃でしたか。大島泰

信先生のおすすめで、大学の講師にして頂きました。古いお話ですわ」
そう言って、先生は静かに笑われた。

貨物自動車に飛ばされる

「浄土寺との御縁はどういうことで」

「師匠の弟が住職していましたのが、突然施餓鬼会の疏を読んでいる中に倒れて、死んでしまっていましたね。そんなことで、大正八年に、私が住職になりました」

ところが、大正十三年に八王子の師匠が死なれた為、極楽寺も、五年間住職をした由。

「当初兼務していたのですが、両方では大変ですので、暇で勉強のできる寺を私が頂いて、極楽寺は小沢さんに継いでもらいました」

小沢氏とは、大正大学、浄土学の教授である小沢勇貫師のことである。兄弟弟子ともに浄土学の学者として、今日をなしたわけである。

「それでは、爾来、先生の生涯は淡々としたものであったわけですか」

「まあ、お蔭様で、そうなんです、ただ一度、死にかかったことがあります。貨物自動車にはねられたんです」

丁度そこへ、一人娘である阿川文正師の夫人が、お茶を持って、部屋に入ってきた。

「ねえ、あれはいつだったかね」

「昭和十年頃ですよ。私が五才の時ですから」

「そうそう。そうだったね。いや、この娘はよい子でしてね」

とたんに、娘礼讃が始まった。夫人はデレデレと、笑ってさえた。

「頭をひどく打ちましてね、気絶してしまっただけです。そこへ、丁度通りかかった古川橋病院の医者が助けてくれましたね。全く命の恩人でございましてね。見も知らぬ私を担ぎ込んで手当てをして呉れて助かりました」

それ以来、上人はこの命の恩人に欠かず益々のお礼をしたという。

「限りある寿命を、今日こここまで生かさ

れた御恩を、この医者に感じておりますのです」

この為、先生は、終に片目をいためられ、今日では、殆んど見えないそうである。色眼鏡をかけておられるのも、その為だということを、記者は、この時始めて知った。

生きものは、何も殺さない

「ご日常は、どんな風で」

「はい四時半に起きて本堂に参ります」

「随分早いですね」

「え！ 八王子時代から、早起きで、もうずっとやっているんです」

それから、二時間程念仏をされ、更に一時間程、境内のあちらこちらにお参詣になる。

「なにせ、いろいろな動物が死にますのでこれを境内のあちらこちらに葬ってやるのです。犬や猫や、スズメや、ねずみなど、なんでも死んでいるのを葬って、石で墓を造ってやります。それを毎朝拝んで廻るの

ですが、一時間程かかりますね」
良寛さんのような上人である。

「生きものは、殺さないように心掛けております。そして、死んだものは、手厚く葬ってやります」

法然上人が虫を殺さぬよう、地上一尺のところを歩かれたと聞いたことがあるが、上人も、そんなお心掛けのようである。

いろいろと、身の上話を聞いたので、最後に、上人の骨頂としての宗乗について聞いてみた。

信念の念仏をせよ

「浄土教の現代的理解については、どうお考えで」

「昔も現代もあったものではありませんね。弥陀如来を信じて、念仏すれば往生できるというのが、真実なんですから、それを、実践するだけです。真実は不変なものですから、これを信じ行ずる以外にはない筈ですがね。それをやららないで、現代的理解も何もありませんね」

ここまできると、厳然とした上人の信念の談となる。今までの柔かムードは消えて決然としている。

「自分が信仰を確立してこそ、他に説くこともできませんが、あやふやな信念では、とても、念仏は説けません」
折り重なるように、上人は断言された。

「浄土教も、浄土学も、学問するは生ず、信念を確立して学ぶべきでしょう。その点これからの人に、しっかりやってもらわねばなりませんね」

それはそれとして念仏生活は、徹底している。今日数少ない信念の念仏行者であろう。毎月十四日の念仏講の日は、朝九時から、夜八時まで、別時念仏を修せられているという。一ツ木地蔵尊で名高いこの寺も、朝夕に念仏の声は絶えない。

「宗学は信念なくして駄目です」
説き続けている。明滅するネオンを背にして、記者は心強い気持ちを抱きつつ、この寺を後にした。
(安居香山)

理倫の討仇

元成木鈴

保延七年（一一四一）の春、岡山地方の豪族として安楽な生活を送っていた漆間家に、突然波乱が起こった。預所明石定明の夜襲を受けたという。深手を負った時国は枕頭に法然を呼び、「お前は決して敵をうらんではいけない。うらみは世々いつまでたってもつきることがない。武士の子として父の仇を討ちたかろうが、それよりも早く出家して、父の

菩提を弔うとともに、他人をも救える仏道の発見に努めてくれ」と遺言した。そこで法然は母の弟である菩提寺の観覚得業のもとへ引きとられることになった、と諸伝記には記されている。これは結果論である。確かに後世の法然はそうなったから父時国の遺言が生きてくるが、当時の社会はそんな甘いものとは思われない。子供の将来を考えるのは、いつの世になっても変わらない親の心情であろう。しかし社会は親の気持ち通り自由になるものではない。法然の場合、規模は小さいが一種の戦争である。戦いに破れば、財産は没収され、一族皆殺しになるのが常である。幸い死を免がれた法然ではあったが、無一文の彼に生活の設計が立つわけがない。法然が出世をするために残された道はただ一つ、僧侶になることだけであった。そこに時国の遺言の価値を認めなければならない。武士の子として生れれば、親の敵を討つのが最高の道徳であったが、経済的にも年齢的にも、法然にはそれが不可能であった。だから当時においては可愛想であった。しかし道徳の内容は変わる。現在の道徳からいえば最高の考え方だったと

いつて過言ではない。

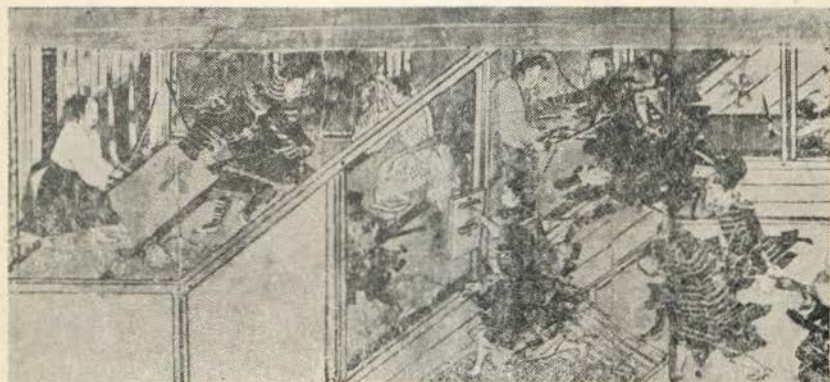
仇討で有名なのは、何といっても曾我兄弟の仇討である。建久四年（一一九三）五月、源頼朝が富士で巻狩をしたとき、曾我十郎祐成・五郎時致兄弟が、父河津三郎祐泰の讐といて工藤祐経を殺した。兄弟は祐成が九歳、時致が七歳のときから復讐を決心したという。そして胆に命じながら成長し、絶えずそのチャンスをうかがっていたという。五月二十八日は朝のうち小雨、日中は晴れたが夜に入り強い雷雨となった。工藤祐経は神野旅館で王藤内らと遊女の手越少将や黄瀬川らを交えて交会していた。そこへ兄弟は父の敵を討つと高声で叫びながら切り込んだ。灯は消え大騒動となった。結局祐経の首を取り目的は達せられたが、兄祐成は死に、弟時致は頼朝の前に向ったが捕えられた。

親の仇を討つことは当時珍らしいことではない。それなのに曾我兄弟の場合は、なぜ有名になったのであろうか。それは単に親の敵を討つたというばかりでなく、頼朝政権にたてついた勇敢な行動を賞讃したのである。治承四年（一一八〇）十月、曾我兄弟の曾父伊

東祐親は、平重衡に属しようとして伊豆の鯉名の泊りから海上を廻って駿河へ出ようとしたところ、天野遠景が知って祐親を捕虜とし、黄瀬川の頼朝の旅宿へつれて来た。祐親の二男祐泰の恩義に感じ頼朝は祐親を恩赦しようとした。しかしこの報に接すると祐親は自分の行動を恥じて自殺、息子は褒美を辞退して平家につくことを主張したため頼朝に殺された。この二人の行動は武士の間に美談となったことも人気の一つであるが、ともかくこんなわけで伊東家の生活は困難になった。そのうらみを晴らすことも敵討の理由である。

ともかく時政は狩野・新開らの質問にたいして、最後の所存はお前から伝えてもらいたくない。じかに頼朝に会っていいたいといった。そして頼朝の前で宿意を語った。それが勇敢であるというので人々が感心した。

いやそればかりでなく、祐成の妾であった大藏の遊女虎の行動を見おとしてはならない。絶世の美人とさわがれた十九歳の彼女は、祐成の三七日忌の法事を箱根山の別当行実房で行った。和字の諷刺文を捧げ、唱導の



定明夜襲の図（動伝）

施物として高価な薔毛の馬を贈った。その上彼女は剃髪、出家し、黒衣に袈裟をかけて長野の善光寺へと足を向けた。このことが大いに人気を呼んだらしい。『吾妻鏡』には、見聞の僧俗悲涙を拭わないものはないと書いてある。曾我兄弟の仇討が有名になったところには、この劇的な事実の価値を見落してはならない。

人間はどんな時代にも、どんな社会でも、真・善・美を求めようとする意志がある。しかし、求めようとする気持は変らなくとも、それぞれの内容は時代とともに変化をする。絵画にしても彫刻にしても道徳にしても変らないものはない。だから最近文部省で云々する人間像や道徳項目の規定などは滑稽至極である。道徳教育の大切さはいうまでもない。しかし徳目を規定するとは何と頭が悪いことであろう。不思議な話というほかはない。親の敵を討たなかった法然の場合といい、勇敢に仇を討った曾我兄弟の場合といい、その時点における評価と、時間のたった今日の評価は違うのが当然である。それが歴史というものである。

熟益正法の開顯

僧俗一体の在家道を説く

孝道教団



信者が心のふるさとあがめる仏舍利殿

藤井正雄

国際的になつた

ハマ名物「孝道山花まつり」

日本一と折紙つきの孝道山花まつり行事は、横浜の名物の一つに数えられているが、本年度で十五回目を迎えた。豪華けんらんりに四月一日、七日、八日の三日間、教団本部のある孝道山を中心に横浜市内にくりひろげられた。セイロン、アメリカ、ニュージーランド、ガテマラ、ガーナの数十名の在日大・公使台湾、韓国からの多数の篤信者、国内では比叡山延暦寺をはじめとする多数の名僧知識が参列。横浜の繁華街にくりこんだ三十数台の花山車のなかにはセイロン、韓国、台湾からのお国自慢の出しものが花をそえて、見物人は市中を埋めつくしたという。

年々規模が大きくなり、国除色が豊かになっていくこの花まつりの行事ひとつをとらえてみても、孝道教団が昭和十一年に創設されたからの発展ぶりを窺うことができる。

教団発展の礎は

岡野夫妻の理性と感性の組合せから

作家石原慎太郎は、教団創始者の岡野夫妻について、「理」を説きながら暖かく茫洋と

した統理と、「感」をもちながら玲理な副統理の夫婦を眺めていると、宗教という世界ではなく、もっと平俗に、一つの幸福な夫婦像をみる思いがすると述べている（山岡莊八監修『菩薩道を行く』九—十頁）。

孝道教団は、実に岡野夫妻の理性と感性との絶妙な組み合わせが両輪をなして、「孝道」の法輪を動かしたといつてよい。

岡野正道統理は茨城県新治郡出島村の出身で、十八才のとき母方の従兄弟にあたる黒田相海大僧正のすすめから埼玉県川越にある天台宗星野山無量寿寺中院で出家得度して仏道を修行、二十二才のとき還俗して東京、札幌で電気医療機械会社につとめ、独立して賛付材販売業、大正十二年の関東大震災後、横浜にもどって電気関係の仕事につとめ、同十三年に現在の副統理貴美子と結婚した。

還俗して後も法華経の研究に余念のなかった岡野正道と、仏教信仰の厚い家庭に育った貴美子との出会いは、仕事のかたわら其の在家仏教を求めての求道遍歴となる。あるときは夫婦ともども新興宗教に入信し、のちに副統理となった貴美子は身をもつての苦行—大

寒にあつては水行をし、法華経葉王品にある焼身苦行にのつとつてローソクで腕を焼いたりの連続—から感応道交して靈能をえ、統理正道の法華経の研究から熟益正法の開顯となり、「理」と「感」が一組となつて、ここに今日の「孝道教団」が誕生する。

熟益正法・みのる法華経の開顯

天台宗、日蓮宗、孝道教団がいずれも所依經典とする法華経それ自体は変るものではないとしても、その理解の仕方、行じ方には大いに違いがみられる。すなわち、天台大師から伝教大師の時代は「理の法華経」、日蓮上人の時代は「事の法華経」であつた。日蓮上人の御遺文書『三種教相』には「法華経は種・熟・脱を論ず」とある。すなわち、法華経には、種子を播く「下種益」、花が開いて実の熟する「熟益」とり入れをする「脱益」の三つの教相がある（ここで益とは時期段階、時代の意味）。正像法の時代は脱益の法華経でよかったが、末法の初めにあつて日蓮上人は下種の時代にふさわしい誰れが実行できる唱題修行を私めた。しかし、三益循環の法則にしたがえば、現代は日蓮上人が

種を播かれてからその種子が実を結んで熟する「熟益」の時代に当たっているから、天台宗の「理」、日蓮宗の「事」とを融合した「理事円融の法華経」すなわち「熟益正法」みのる法華経を行じ、信仰しなければならぬ。すなわち、人法時処の合致した孝道教団の唱導する「みのる法華経」こそが、現代を救う唯一の教法なのだといふのである。

このようにして、現代に約束された熟益正法、みのる法華経の観心は、法華経寿量品のなかの「如来の秘密神通の力」に見出される。そして、その実践は、一言でいえば、菩薩道を行ずるにはかならず、「孝順の道」につきることになる。

孝道教団の「孝道」とは、『梵網菩薩戒経』の「孝順は至道の法なり、孝を名づけて戒となす」の文に則つたものである。すなわち、「孝」とは真理、「順」とはまじりつけのない言葉で真理に従うという意味で、天地自然の道理がすなわち孝順の道にはかならないことから、「孝道教団」と命名されたという。

縦横十文字の孝道

統理は孝道についての次のように述べてい

る。

「孝道」というのは単なる生活の道德的規範でなく、もっと人間の本性に根ざした根本的な絶対の道であり、端的に申せば、絶対の法が言説となってあらわれたものが「法華経」であり、それが実生活の上に実践としてあらわれたものが孝道なのであります。

またこの実生活を、縦と横の二つの面から見ました場合、根本的な「孝道」の精神が、縦につながる祖先父母子孫という、時間的に永遠なる関係の上にあらわれたものが、いわゆる「孝行」であり、それが広い社会の横のつながりという、空間的に無限の広がりをもち普通の関係の上にあらわれたものが、いわゆる大乗の「慈悲行」なのであります。

.....
まことに、過去、現在、未来の三世を貫ぬく「縦の孝道」と、一切衆生に慈悲を及ぼす「横の孝道」を説いて、結局、現世と霊界のあらゆるものを救う偉大な教え、これが「法華経」であります。(熟益正法概

論「二四一五頁」

方便から正法へのめざめ

「過去の因を知らんと欲せば現在の果をみよ、未来の果を知らんと欲せば現在の因を知れ」「悪因悪果」「因果応報」——すべて現在の不幸・貧・病・争は前世の宿業、因縁によつて与えられている。孝道教団は、信者にまづ前世の宿業をたちきることを教える。

御礼

K・I (五十七才)

頭部のガンのため肩胛腺がはれ、食物を通らず困っておりまして、誠に申わけなくも御祈願を十三日にお願ひ申しましたところ十四日にはガンの部分が急に小さくなりまして、教授が全く不思議だとただ驚ろいておりました。そして十数人の先生方が診察に來て不思議がっております。

両統理様のこのお慈悲に主人共に厚くお礼申し上げます。一生懸命精進させていただきます。中間のお礼と報告を申し上げます。

合掌

妻 T・I

七月十五日

両統理様

このような両統理の祈願によつて病いや争いの鎮まったことに對する礼状は七万通を越すといわれる。一年三六五日、午前中は両統理による信仰相談が開設されているが、毎日午後時頃まで昼食抜きで続けられるというしかし、孝道教団は「現在理益」宗教だけに終つてはいない。孝道教団は新宗連には加盟せず、れっきとした全日仏の一員であり、いわゆる新興宗教の範疇には入らないと強調している。このような靈能は、法華経二十番の説く方便化他行の実践であつて、副統理が苦行によつて生身でかち得た「神通力」によるものだといえる。

副統理……信仰を知らない人にご縁を与えろというときは、ご利益がありますよ、おはいりなさい。ありがたいことですよ、親孝行の道を実践することによつてすべて救われまますよと、方便をもつて導きますけれど、その根本は菩薩への道です。大きな役割がございます。現在のお坊さんたちでも、もっとお経をたくさん勉強なさいまして、大きな神通の力、徳の力、知慧の力を



4月7日 花まつり前夜祭

身につけることによって、お寺さんもどんな榮えていくと思いますが、そういう力を備えようと思わないから、お坊さんが怠けていたから、死んだ仏教になったのではないかと思えます……『菩薩道を行く』一八頁より、傍点は筆者

右の引用から窺われるように、既成教団への批判もこめられており、そこには既成仏教の現代に生きる姿の真の在家教団は孝道教団である、とする自信がみちあふれており、一方、既成教団側からの参観者はあとを絶えないといわれている。

“和”の教団

孝道教団ほど順風に帆をあげた新興在家教団はまずない。現在、信徒数三十五万世帯、本部のある京浜地区を中心とした関東地方がもっとも多く、東北（山形）別院のある東北六県がこれに次ぎ、以下中部、関西、南九州、北海道、四国、琉球の順で広がりを見せ、さらにセイロン、ネパール、北米、ブラジルなど海外にまでゆきわたっている。とくに、セイロンからは昭和三十三年に仏経二五〇〇年式典に日本仏教徒代表の一員として国賓招待

をうけて出席してから、交流に力を入れ、在日留学生にはスカラシップを、また大乗仏教研究にセイロン仏教会から派遣された青年僧が現在、教団で学んでいる。また、宗教放送を通じて、日本とブラジル両国の友好親善に貢献した功績を讃えられ、両統理にブラジル政府から「イポリサト・ジョーゼ・コスタ文化功労章」が贈られている。

国内にあつては、統理は全日本仏教会理事、評議員、全日本宗教連盟理事、国際宗教同志会理事の要職にある。とくに、統理は天台僧であったことから比叡山との関係は深く、昭和二十七年夏には天台宗総本山延暦寺から、伝教大師が法華経とともに将来した三国伝来の仏舍利を譲渡され、また三十三年秋には、統理に「権大理想」、副統理には「紫衣ならびに菊花綵紋白大五条袈裟」が贈られ、さらに三十五年春には同教団の仏舍利殿完成を機に、伝教大師が点じてから一一七六年にわたってなお輝き続ける八不滅の燈明を継承している。

杜市は「薫風茗を繰る時」と申しておりすが、緑茶の香りをしみじみと味ふのは、やはり五月の候と申せましよう。

「新茶でました」と茶輔の店頭のピラが、薫風になびく様は、目にも嬉しいものであり、八十八夜につまれました新茶の香りは、民族意識を取り戻してくれる感がございす。

江戸時代茶師は、宇治には約三十六軒ほどもありましたそうですが、全部同格というころではなく、茶師のうちでも高い位を与えられ、帯刀を許された上に、頭を丸めて十徳というものを着せられ、お茶師を全支配したのが、有名な上林政重一家であつたと申されます。其の上、この人は代官格を与えられたともききますが、八十八夜につまれました新茶は「御物お茶壺献進」と申して禁裡への献上茶と將軍家直用のお茶壺道中として、東海道五十三次を練り歩いた事は、有名な話でございすが、この行列には多数の役人を仕立て、まことにいかめしく、この行事が終わらないうちは、初荷を出すことも許されず、「御物御茶壺出行無之内は新茶不可出」と高札が宇

お茶をおいしく

—その5—

新茶のよろこび

黄檗幽茗流家元

三浦純亭



治橋畔に立てられたほどで、御茶師はもとより宇治の里人は、この光榮あるお茶壺献進は大変な緊張さで、その行事の無事を念願して、道中筋の諸大名も道中の警固、送迎に非常な神経を使つたと申します。たとえば、京都御所への茶の献上を相済ませ、その後江戸へと運ぶために、宇治橋付近より出発となる、四十人ほどの一行が、東海道を通ふ日数、二週間がかりであつたと申されます。又、この行列は五撰家、門跡、貴族なみの待遇を受け、途中でこの行列に逢ふと、たとえ大名でも道を譲つて敬意を表し、その家臣は馬から降り、町人は土下座したとも云われ、まったくばからしい行事であつた様です。新茶を味う事は、造った人への感謝の念は何時の世にも尊いものでございすが、これまでにしても人騒がせの行事は、全く苦笑を禁じ得ません。

この行事は寛永四年後水尾天皇の御代、徳川三代將軍家光が宇治の上林家に命じ、献上茶を謹製せしめた時に始まり、東海道五十三次のお茶壺絵巻は以後百年余りの間にわたり、斯の様に豪華にそして莊重な儀礼を以つ

て行なわれてまいりましたのが、八代將軍吉宗の時代に到つて奢侈禁令下に、この慣例が廢しされたと申されます。せめて、今日私どもは神仏に供してから頂く事に依つて、造つた人への感謝とともに、その恵みをも喜びたいものです。新茶はよく製成されて有りませんために、あくまでも走りの味として、少しお求めになられた方が賢明です。

古茶は内から外へと香り、味と共に楽しみ、新茶は外から内へと渾う香りをよこさす。初夏のさわやかさをしみじみと味わいます。古茶は、一合の急須の湯に小さじ一杯強を入れ、山吹色に出しますが、新茶の上手な入れ方は、一合の湯に小さじ軽く一杯熱湯でさっと入れ、薄緑色に出します。ス様に致しませんとにがみが多く、風味はございません。魔法瓶のお湯であれば、新茶・古茶ともに茶を先ず急須に入れ、その上にお湯をさすようにしゅうごさいします。(下投法)

童謡の中の

へづいづいづつろばし　こまみそづい
へ茶壺におわれて　ドッピンシャン
の一節もお茶壺道中の当時の風刺うたとき

きます。こんな風俗も余りうれしいものではないかもしれませんが、そうかと申して、少々汗ばむ五月の氣候に、咽喉をうるおすために、今日の様なコーラーやジュースのようにがぶ飲みは風情はなく、新茶だけはしめじみと歴史を回顧しながら、五月のさわやかさとともに、心静かに味わいたいものでございます。

緑茶こそ日本人の心を教えてくれます。

菊舎の句にありますように

「山門を出づれば日本ぞ茶つみうた」
と、詠まれた宇治万福寺周辺も、只今では茶晶は全くなく、団地などでつぶされ、淋しい気もいたしますが、

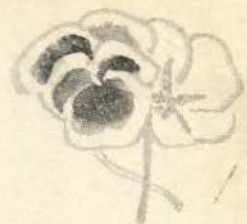
末の「沈括」の自作の詩に、

雀の舌と誰れかいひ初めし新芽の香、よも知らじ、北国の人、自らなる蠶草は、
一と夜の風に生ひも伸びたり一寸も

と、申し新しい茶の芽を古人の誰れかが、「雀舌」といっているのと有りますが、一番茶を味わたあとの葉は、少しの折れもなく、細くまことに美しく、雀の舌が葉に似ているのか、茶の葉が雀の舌に似たか、私は雀の舌を見たことは有りませんが、「雀舌」の一筆

を高僧に頂き、五月の候の掛物に用いております。ともかく新茶を味わいます時は、さわやかな香りと共に静かに物考えさせたり「新茶のよろこび」はつきません。

「緑茶の効徳として」ビタミンが欠乏いたしますと(野菜不足)御存じのように壞血病にかかりやすくなりますが、それを補うのもお茶が一番ビタミンCを含有いたしておりますため、お奨めいたしたいものでございます。又、「梅茶の喫茶法」などは、我が国の特有の「仙法」と云われるほどで、毎朝梅干一個に一杯の上茶は、精神爽快、身体保健上にも著しい効果がございます。どうぞ一度お試し下さいませ。「茶がらの効用として」これは一例でございしますが、たとえば、石油等が手について悪臭がとれぬ場合、茶がらで洗い下さい。直ちに悪臭はとれます。お茶には如何に悪臭を消す効力が有るか。又、茶がらの効用にしても例をあげますれば、牧草にいとまがございませんが、これは全く茶の一要素であります。芳香油の強い浄化作用に依るもので、斯様に茶には他の臭気を吸収する力がありますだけに、貯蔵法御心遣い下さい



合 掌

—合 田 微 雪—

「全身麻酔による乳ガン手術研究の犠牲に、母と妻の競争心を利用。遂に一人を盲目にして成功」という女流の小説出現。若しその人々に合掌心の一かけらでもあった

り、嫁姑、手を取合つて心明るく猛身したるうに。

ある人がA氏に「両親を亡くした甥を幼時から育て大学まで卒業させたのに、いまだに父母と呼んでくれません」という。「籍は？」と聞くと「そんなのですから無論入籍していません」と。

A氏は一人娘を迎えた養子を直ちに家の筆頭者者として入籍し、恩着せがましくなつてはと、聲に知らせもしなかったが、聲の方もいち早く名字を変えた名刺を作っていた。

ハネムーン先から東京住みとなった若い二人の胸中を思い、老夫婦も幸福感でいっぱい。他人に娘を奪われ惜しい淋しいなどという人々と、全く対照的である。

翌年はや郷里でお産という事になったが東京で一人暮らしの聲が風邪を引いたらしいとの報に、氏は直ちに上京。折しも盛夏。全列車の指定席満員。普通急行二等車ギッシリの通路に熟睡を図り、翌日の看病へのスタミナ貯蓄。病人食にも自信あり。中学二年の暑中休暇中、病母に看護婦のしているのを見学

したのが、そのキッカケだった。

処が、若い病人はもう全快していた。が連続出張と病上りの山成す洗濯物は、狭いマンションの物干場に満鑑飾三日。その間老体に暑気。バス（湯）につかっている時と、水で口を冷しながらの食時中だけ、蘇生の思いだった。

洗濯や料理は昨年夫人の入院中、結婚前の娘には頼れずと、稽古しておいた。世には亡妻代りに娘を使い古し、婚期を運らせて省みぬ、ヤモメ父親が多いというのに。

いよいよ出産間近の頃、地方公立のそれぞれ医学權威の、出産と生命に関する意見の対立を伝え合う長距離電話では、聲男とも全く歯に衣を着せなかつた。そして慎重決断の下に生れた男子は、後ベビーコンクールで健康優良児となった。

だから世の嫁姑も腹藏の無い喧嘩口論結構。但し飽くまでも生活、人間向上の為の建設的愛情の裏付けを必要とし、無駄愚劣な感情の添加物は、絶対に赦されぬ。なお右か左かの決定後は、明朗サッパリ争いを

忘れ、毫もシコリを残すこと厳禁。

冷静に胸に手を当てて考えて欲しい。

「最愛の我子の、最愛の妻」「最愛の夫の、最愛の母」ではないか。その感誠合掌心さえ失わねば、醜いさかい如き、起らぬはづ。

○ ○ ○

一度しか無い人生である。その有難さを忘れて体を粗末に扱い「葉石効なく」また心を粗末にして「社会の罪」等、薄情無責任な言辭で罪り整理^{かたづ}けられては浮ばれぬ。

人事を尽せば心も坦然天命が待てるし、不結果に終つても後顧の憂いなし。

溺れそうになり大慈悲にお縋り申すより、転ばぬ先の信仰こそ、より自然。

更生美談となるより、更生せずと済む一生の方が、おだやか。

勝者が己の鼻血をも省みず敗者のコーナーに出向き、相手の肩を抱いて温く挨拶を交すプロボクシング。銀メダルが金メダル

を仰ぎ握手を求めるオリンピック。共に今の今まで全力を抛ち激闘し合った、敵身方ではなかったか。理屈抜きに合掌信仰の姿を、そこに見る。

体は健康、生活も順調できた人は、いざ危期に立たされてもウツカリ気付かず、実に罪が無い。

社交のみに腐心している者は、それと知つても嫌われては損と、忠言を差控える。時に生半可な注意を与えて従わず不結果に終るや、それ見た事かといわぬばかり。

次手ながら、とかく富める親戚とは足繁く付合い、貧しいそれには目もくれない。遠隔地の気の毒な人には寄付行為華々しく示し、

近隣のそれには、意外と冷淡な人もある。

この時、正しい信仰に生き合掌心を抱く人々の、貴重な使命が待っている。進んで歩を運び、救助の手を差延べて欲しい。

耳を澄ますと風のまにまに、何教かの祈禱らしい虚ろな響が、私の机辺にまで聞えてくる。正しい御親をいただくこの身の幸を、染々痛感。

○ ○ ○

ここに好例の一人あり。わが子の学資捻出の為、内職にささやかな食糧品店営業。ライバル者が他にありながら「浄土」誌愛読によって培われた謙譲な態度に、客からも非常に愛され、夫人の一男は今春日出度く大学卒、一女は目下外語大で精意勉勵中。因みにこの少女、曾て小学校時代白紙に線を引いた手製無音のキーで自習し、学校の式に代表でピアノを弾いた思出も持っている。

前記女流作中の主人公の心に「数多女性の生命を救おう」という慈悲の灯がともつたればこそ着手された、その偉業の途中で哀れ打消されていたとは、返すがえすも悲しい。そつと保ち続けていたら、己一人のみか近親者達まで道連れにし、地獄道に陥らずと済んだものを。

(種々反省させられた作に、合掌)

浄土宗のおしえ <4>

本願について



柴田哲彦

我々が日常生活の中で浄土宗のおしえを実践してゆくために、安心・起行・作業（四修）・三種行儀等が組織されておりますが、これらはいずれも阿弥陀さまの本願によってボンノウを具足した我々が、日々不安の多い迷いの世界から、何の苦悩もない、清らかな明るい真実の世界、つまり阿弥陀さまの世界へ生ずるための心がまえと修道法であってそのひとつひとつの内容につきましては既にご理解いただけたことと思います。そこで今回はボンノウ具足した我々が浄土へ往生できる要因となっている本願について考えてみることにいたします。



「自力本願」とか「他力本願」と云う言葉を我々はよく聞にいたしますが、一般には「自力本願」と云うことにつきましては、他

人の助力なしで独力でものこを行うことをさし、「他力本願」とは自分は何もしないで、すべて他人の力によって目的を果す「あなた任せ」的なあまりよろしくない意味で使われているようであります。これはもちろん浄土宗のおしえの誤った解釈から出た言葉であります。この言葉がそのような意味で用いられてしまうほど浄土宗のおしえの中には我々と阿弥陀さまの本願とは切っても切れない関係にあるのであります。

阿弥陀さまにかぎらず、すべて仏は仏となる以前、それぞれの現想を実現するため誓願をたてられて、ながい間のきびしい修行をされ仏となられるのであります。この誓願を本願と申すのであります。この本願については、宗祖法然上人が

「一切の諸仏におのおの総別の二種の願あり、総とは四弘誓願これなり。別とは釈迦の五百大願、葉師の十二の上願等の如きこれなり。いまこの四十八願はこれ阿陀の別願なり」△選択集▽

と申されておりますように、本願には総願と

別願とがあります。我々人間にも、人によって学問をしたいとか、社会事業に従事したいとか、それぞれ別々の願いをもっておりますが、しかし共通して生きてゆかねばならない「生きたい」と云う願いをもっておりますように、仏さまも各々特異な願をもっておりになりますと同時に、すべての仏さまに共通した願もあります。つまりすべての衆生を教化し、やすみなく菩提を求めようとする願いで、これを総願と申します。



一方ここでお話しする阿弥陀さまの本願とは阿弥陀さまの別願で、お釈迦さまに五百の本願、葉師さまに十二の本願があると同じく四十八の本願があります。『無量寿経』にはこの四十八願がどのようにして成就されたかを見る事ができますのでご紹介いたします。

阿弥陀さまがまだ法蔵比丘と云う名の修行中の沙門のとき、世自在王如来に詣で、比類

のない、もっともすぐれた真実の世界を建設し、苦しんでいるあらゆる人々を救済するために、熱心におしえを請うたのであります。

このような法蔵比丘の請願に対し、如来は善悪、勝劣を含む二百一十億のあらゆる世界を見せられました。そして法蔵比丘はその中より、もっともすぐれた善い面のみを取捨選択され、さらに五劫と云う大変ながい間、思惟し修行され成就されたのが阿弥陀さまの四十八願で「われ超世の願を建つ」△四誓の偈▽とされておりますように、あらゆる本願の中でもっともすぐれたものであります。

このようなわけで四十八願が成立したのでありますが、宗祖上人は『選択集』において「およそ四十八願は皆本願なりといえども、殊に念仏をもって往生の規となす。……ゆえに知りぬ、四十八願の中に既に念仏往生の願(第十八願)をもって本願の中の王となすことを」

と申され、阿弥陀さまの本願は四十八ありますが、そのすべての願は第十八願即ち「もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生至心

に信樂してわが国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ。ただ五逆と正法を誹謗するをを除く」△無量寿経▽

の願に代表され、本願の中の本願つまり王本願であるとされたのであります。ではなぜ第十八願即ち念仏往生の願を、王本願とされたのかをご説明いたしますと、宗祖法然上人が比叡山で学問にはげまっていたとき

「我ら如きは、すでに戒定慧の三学の器にあらず。この三学のほかに、わが心に相応する法門ありや。わが身にたえたる修行やあると、よろずの智者にもとめ、諸の学者にとぶらひしに、をしふるに人もなく、しめすに輩(ともがら)もなし」△四十八巻伝▽

と述べられておりますように、智慧第一の法然房と称された宗祖上人でさえ、自分は三学の器でないといわれ、人間である以上だれでもボンノウを具足し、欲望の世界をさまよっているものであって、従来のむづかしい学問や、きびしい修行をすることは不可能にちかきもしかりにできたとしても中途はんばなものの

に終ってしまうだろう、と云う結論にいたったのであります。そこで自分に適したおしえはないものと、多くの智者学者と云われる人々を訪ねまわったのですが、なっとくのいくおしえを見出すまではゆきませんでした。しかたなしに、みずから経蔵に入って、さがし求めたところ沢山の書物の中から、唐の善導大師の著作である『観経疏』と云う一書を手に入れました。その中に

「一心に専ら名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるはこれを正定の業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」と善導大師が述べられて、阿弥陀さまの名号を称すること、だれでも一人のこらず、浄土へ往生させると約束してくださった第十八願を、唯一絶対の救いとおすがりしているのをご覧になって、宗祖上人はご自分の信ずべき、そして行うべき指針をはっきりとつかまれたのであります。

善導大師が四十八願を「一々の誓願は衆生のため」A般舟讃Vと云われており、又特に「四十八願の中に、この願(第十八願)殊に勝れたりとす」A三部経大意Vと宗祖上人が申される第十八願は、阿弥陀さまがボンノウ具足の我々を、ことごとく往生せしめるためつくられた本願であり、阿弥陀さまから我々に対する、かぎりないはたらきかけであります。

しかしこの内容も検討してみますと、願文中にはどうしても我々が守らなければならぬ、三つの心がまえが示めされていることが解されます。

つまりそれは「至心」とされている真実な心。「信樂」と云う深く信ずる心。「わが国に生ぜんと欲して」と云う廻向して浄土へ往生しようとする心(一月号「三心について」参照)であります。

このようにして阿弥陀さまのみ心と、我々衆生の心とが一致してこそ毎日毎日が心から幸せを感じる信仰生活が送られるのです。

新刊のおしらせ

——大道社こどもの本シリーズ

文・高橋良和 B5判・32ページ

え加藤ただし 価一〇〇円・五〇円

知恩院さん

知恩院の歴史を通して法然さまのおしえをしつかりと身につけていただくようにと楽しく説きおしえる教育まんが

目次

聖のたんじょう勢至丸さま・法然さまとなる・浄土宗をひろく・せんちやくしゅう・法然さま土佐へ・一枚起請文知恩院のおこり・知恩院のあゆみと七不思議のいわれ・御影堂を中心に・御忌もうで……(解説付)

東京千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 大道社

東京八二四七番
電話(二六)五九四四

武優和元

キリシタン追放

—その 1—

鶴田湛泉

天文十八年の秋、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に来てキリスト教を伝えて以来、漸次に九州全土にひろがり、元龜、天正から慶長の頃になると、長崎地方はまるでキリスト教の東洋の総本山の觀を呈していた。

秀吉がキリシタンの布教を禁止し南蛮寺をこわし宣教師を海外に放逐したのは、九州攻めから大坂に帰った天正十五年のことであったが、この時、有名なキリシタン大名の高山

右近は、キリシタンをすてるか、己の領土をすてるかを迫られた。十一才で洗礼を受けた右近は終に領土をすてて信仰に生きたのであるが、右近の軍略にすぐれていたことを恐れていた秀吉は、前田利家の金沢に放逐して厳重に取り扱うよう命じたのだった。

秀吉が歿すると禁断のゆるんだのに乗じて宣教師の活動が活発となり、慶長五年頃には天主堂が津々浦々に再興されて行つた。

慶長六年には家康は二通の朱印状を与えて宣教師等が京都、大坂並に長崎に居住することを許した。これは勿論、家康としては通商上の立場を考へてのことと、その当時、家康はポルトガルとの貿易によつて莫大な利益を得ていたのである。

京都には以前よりもずっと美しい天主堂が建てられ、又伏見にも天主堂と居宅とが建てられた。

公許された天主堂は長崎の外には京都、大坂、江戸との三ヶ所しかなく、その他はいわゆるもぐりで、大名達の特別の厚意によつて黙認されているにすぎなかった。

大名達も外国との貿易を行つていたものも

あつて、貿易をしたいためキリシタンの布教を黙認していたのであつた。

ところが家康は慶長十七年三月十日、突然キリシタンの布教を禁止し、京都所司代の板倉勝重に命じて京都にある教会を毀しためたのだった。

その時たまたま有馬藩主、有馬晴信の事件が起つた。これは晴信の子の直純が父の計画を訴へ出たためであるといわれているが、贈賄と陰謀とが明るみに出された。このため岡本大八は妻と共に、火刑を宣告された。すると今度は大八は、晴信が信徒に与して長崎奉行長谷川藤広を暗殺しようと計画していたことをあばいて、逆暴露をしてしまった。晴信も大八と共にキリシタンであるが、晴信は博多で自ら伝道を行い千五百人を改宗させたといわれるほどの信者であつた。

大八、晴信の信者同志の反目からここにはしなくも、家康の側近の男女に信者がいることが発覚するまでに飛火してしまつた。

駿府では家康の寵臣である榊原加兵衛を始め、鉄砲組頭の前主水、西郷宗三郎、そして六千石取りの旗本である小笠原權之丞、彼は

未だ廿四の若年にすぎなかったが、三百人に洗礼を受けさせたといわれていた。堀十郎兵衛、同市之助という兄弟がいたが、市之助は家康の小姓で十六才であった。これら家臣十四名は改易され追放に処せられた。

尚、奥女中にもキリシタンがいることが発覚して、三人の女中は遠島に処せられ伊豆の大島へ流され、ついで新島に移された。彼等は金財産を没収され、妻子も共に追放された。しかも尚、幕府は諸大名に対してこれら改易された十四名を召し抱えること、及び領内に居住を禁止することの触状を配布するというほどの厳しさであった。

彼等のうちでも原主水は最も熱烈な信者であったが、身の危険を知るといち早く逐電してしまった。その後、武蔵の岩槻に潜んでいるところを発見され獄に投ぜられたが、額に十字架の烙印をおされ、更に両手両足の指をことごとく切り落され、尚、この者を挙用する者は曲事たるべき旨の胸札をつり下げられて放逐されたという。その後のこと、駿府の耕雲寺に原が寄宿していることを訴え出たものがあって、このため住職まで放逐されてし

った。

自分の足許に計らずもキリシタンがいたことに、おそらく家康の神経を刺激したに違いない。そのため家康は今後江戸の旗本らは各々十人を組として相互に吟味しあい、若しその中にキリシタンがいたならば直ぐ言上すべきをいい渡した。

ほどなく江戸で、キリシタン千六百人が捕えられた。

こうした情勢から、家康は京都所司代板倉勝重と長崎奉行長谷川藤広に応援せしめて、有馬の新領主となった直純に管内のキリシタンの取締を厳重にするよう命じた。

浄土宗の幡随意智誓上人が、家康の命により教徒を論え論すため、有馬領に派遣されたのもこの頃であった。智誓上人は既に七十一才の高令であったが、家康から軍扇一柄と陣衣一領を与えられると、勇躍して有馬領に赴いた。

この年から翌年にわたって同地方では、相当らしい迫害が行われた。そのため宣教師たちをして家康が死なない以上、布教が出来ないときまで慨嘆せしめたほどの禁止ぶりであつた。

た。

京都のバテレン門徒を追うため小田原城主、大久保忠隣が京都へ上る命を受けたのは、慶長十八年十二月十九日であった。

同じ月の廿三日に家康は將軍秀忠の名をもつて、バテレン追放令を發布せしめた。

これは金地院崇伝が家康の命により徹首筆をとりようやく曉に至つて書き終えたと言われるもので、異国の宣教師をもつて邪宗をひろめ正宗を惑わして本の政体を変更せんとするものと断じ、バテレンを速かにおぼらえとの命令で、背けば刑罰に処するという厳命である。諸大名は教徒を禁圧し、バテレンは異国人たると日本人たるの別なくすべて長崎へ送れと命じた。

こうしてキリシタンの布教を全面的に禁止し、その根絶を計画したかに見えるのである。

前年に出た禁止令は施行の範囲は狭く、駿府と江戸を主とし、京都、長崎、その他九州の若干地域に限られ十分な成果があげられないので、更にその徹底を期するため全国的な禁止令が出たのであった。

パテレンとは宣教師のことであるが、禁放を嚴重にせなければならぬような何か切迫した事情があったのであろうか。

禁教の実施は嚴重になり、キリシタンは各所で詮索された。

パテレン追放の總奉行を命じられた大久保忠隣は、廿六日準備のため小田原に戻り、翌年正月五日、小田原を立ち京都へ向った。

十七日京都へ着すると、その翌十八日から直ちに使命の遂行にかかった。

役人を街の四つ辻に立たしめて大声で、「キリシタン信徒で若しその法をすてない者は、焚あぶりの刑に処するぞ」と叫びしめた。

信徒名簿がくつられキリシタンの寺院一手と二つの礼拝堂が焼き払われ、宣教師は追放され住居が破壊された。捕えられた信徒は、加茂の河原でいわゆる俵責にされた。

各地の諸大名は秀忠の禁令に応じて、俄然キリシタン武士の追放に乗り出し、その財産を没収した。大阪では片桐且元、堺では山口駿河守直友間宮権右エ門の兩人が出張して潜伏している信徒を捜し出し追放に処した。

加賀の前田利常、肥前の松浦隆信、それに父孝高と同じくキリシタン大名であったが、キリシタンを保護していた黒田長政等も、自領内の教徒を弾圧し初めた。

安芸の福島正則は十七才のときキリシタンとなったが、家康によって尾張から安芸に移されてからは広島へ宣教師を呼び宣教師の便宜を公然と計ったが、禁止令が出ると忽ちに弾圧を初めた。

有名なキリシタン大名と知られていた大村純頼は家臣と共に、仏教に改宗してしまつた。

最も古くからのキリシタンの根拠地は長崎、大村、有馬とであった。殊に有馬領内は殆んどキリシタンであったが、有馬の新領主直純はキリシタン禁圧の手腕がないものとして程なく日向の延岡に移封されてしまった。

諸大名の間では禁令の実施の程度はまちまちで厳しいものもあれば、寛大なものもあった。

弾圧のきびしい領内では改宗をあえてしないキリシタン信徒に対する処刑は厳しく或は火あぶり又は苞すつみなどが行われた。

弾圧に対して教徒たちは集合を企てたり、或は行進を行つて示威運動をなして気焰をあげ、互に勇猛心を鼓舞しあつた。

キリシタン禁止の總奉行である大久保忠隣が京都に到着した翌日、早くもその使命の遂行に着手したが、その翌十九日に彼の身の上になくとも思ふよりぬ事が起つた。

江戸に於て忠隣除封の議が決定し、小田原城五万石が没収され、彼は近江に配流されることとなった。

これは忠隣の養女と常陸牛久城山口重政の子重信との婚姻を幕府の許可を受けずに無断に行つたというのが表面の理由であつた。

忠隣は五十年間、家康に仕えて専用され將軍秀忠の側近だったが、この時、彼の子教隆、幸信も追放され、家臣も亦追放された。

この改易事件はその罪の輕いの比べて、その処分が嚴重だったのでいろいろと風説が流れた。

或は政敵の本多正信の画策だといわれ、又大阪方へ通じたためであるとも、或はキリシタンと関聊していたとも噂された。

(つづく)

正法と末法

世間では末法の時代であるから、経文を読誦しても、教えの通り行っても、功德は受けられないと云っているが果してどうであろうか。若し、そうだとしたら、釈尊の教えは現在とは前世紀の遺物であり、何も知らない無智の人々だけがそれに関係していることになってしまうわけである。然し今私達は、この仏教を信じ、理解すべく努力して、そこに心の安らぎを求めているのであるが、それも無駄な事なのであるか。真実無駄と判っているのなら、やめてしまわねばならないがよく考えて見よう。

釈尊は人間の本能に基づく心の動揺から生ずる苦惱を除く為、自ら六年間も苦行し、ここに因縁の真理を発見し、衆生の教化に確信を得て、先づ戒律に依ることを考え、法華經を説かれたのである。即ち人間の苦惱は、色欲、食欲、睡眠欲、財欲、名誉欲の五欲に心

が執られる為であるから、その執われの心を除くべきであると教えられたのである。

この法華經は、釈尊が全智能を発揮してまとめ上げたものだけに、実にすばらしいものであり、これを一読すれば誰れでも必ずこれに帰依したくなるのである。然しこの法華經に教えられている所のは、余りにも程度が高く、誰一人としてこれを完全に実行し、その真髓を体得出来るものはいない程困難なものであったのである。それ故釈尊は如来寿量品の終りで「どの方法を用いたら、衆生を最高の道まで導いて、速やかに仏道を成就させられるであろうか」と、釈尊はあらゆる苦心を重ねて教化に尽力したが、尚その目的が達せられなかつたので、真実困惑の状態が述べられているのであり、法華經での教化は失敗したのである。

然し釈尊はここで衆生教化の計画をあきらめず、今度は別の方法を選んだのである。即ち五欲への執著の心を離す為、別の事を考えたのである。つまり、法華經では因縁の真理を説き、自らの努力によりそれを体得させたのであるが、今度は観無量壽經により、直接

その真理のつかめ方を教えたのである。

観無量壽經に初観として教えられているのがその因縁の真理のつかみ方の第一歩で「沈む時の太陽を觀て、しっかりと心に据え、觀想を集中して動揺しないようにし、沈み終わってから、その映像が、眼を閉じている時も開いている時もはつきりと残るようにする。

これが最初の冥想である」と云われ、続いて觀想の対象として、覺り得た心の状態はこのようにすばらしいものであると、浄土の莊嚴さが教えられ、第三の觀想の所では、睡眠の時を除いては常にこの事を憶えと云われ、その後「このように觀想を行うのが正しい觀想であり、これを正觀と云い、それ以外の觀想を行うのが間違つた觀想でこれを邪觀と云う」と述べられ、更にこの戒めは他の所に於いても何回も繰返されている。この正しい觀想を行うこと、これが正法である。

ところが釈尊の在世中は正觀の主旨が正しく行われていた為、多くの功德が得られたのであるが、釈尊滅後は正觀を行じている中に、自身では気が附かない時に少しづつ五欲への執著が混るようになり、覺り得る心構え

で形だけ調っていても正観から少しづつ遠退き、いくら行じてでも却々覺り得られなくなつたのである。これが像法である。更に後世に至り、その心構えは全く一変し、釈尊が最も憂いていた五欲の觀想が激しく、現代に至つては、五欲への執著を満足させる為の眞想になつてしまつたのである。即ち釈尊の教えられた正觀を行ふことと全く關係がなくなつたのである。これが末法である。ここまで来ると一片の正觀思想もない為、只無軌道に濁流に押し流され、手の施しようもないのである。

この状態を日蓮正宗創価学会では釈尊の教えは二千年で効果が失われていると説明しているのであるが、釈尊の教えはあくまでも正觀のみであり、前述の「これ以外の觀想を行ふのは間違つた觀想で邪觀と云う」と注意されてゐるものを創価学会の人は皆理解出来ず、自ら邪觀を行つて功德がないものと信じ込んでゐるのである。創価学会では釈尊は經文の中に末法を予言していると云つてゐるが、それは事實である。大無量壽經の終りの方に、「仏いいたもう、我、汝らもろもろの

天人民を哀愍すること、父母の子を念うよりも甚し、いま我れこの世間において仏となり、五惡を降化五痛を消除し、五燒を絶滅し、善を以て惡を攻め、生死の苦を抜き、五德を厭しめて、無為の安きに昇らしむ。我れ世を去りて後は、經道漸く滅し、人民諂偽にして、また衆惡をなさん。五痛、五燒還りて前の法の如く、久しくして後、転劇しからん」とある。この訓読は何回か読み返している中に自然に意味がつかめると思うが、ここで釈尊は末法を予言したのである。釈尊に末法を予言させた責任は一体どこにあるのか。

それは後世の人自身にあるのである。後世の人が、釈尊の教えの通り正觀を行わず、必ず邪觀を行うに違ひないと釈尊に信じさせたのである。日蓮正宗創価学会員は皆んなが、釈尊が何故この予言をしたのかその真意が覺れない為、釈尊が自ら二千年で効力を失なうと云つたと主張しているが、この主張は誠に頭腦の低級さを表わしている、釈尊は創価学会の人間のようなでたらめをやる者が現われることを予言したのである。釈尊は衆生の教化を法華經で失敗し、淨土三部經で成就したの

であるが、これはあくまでも釈尊の信念の上の事であり衆生がこの教えの通り行ふことが条件であり、この通り行つて、始めて功德が得られるものであることを忘れてはならない。いくら良い薬でもその薬を正しく用いて始めて病氣が治るのであつて、用い方が間違つていたら、いくら用いても病氣は治らない。

釈尊が確信を以て最後に説かれた觀經は、そのように修行して始めて覺り得られるのであつて、間違つた行い方をしたら薬と同じで少しも効果は現われない。

仏教に末法はあり得ない。それは仏法そのものが永久不変の真理であり、我々はそれに帰依しているからである。末法を信じている人々は皆自己の間違つた修行から末法にしてしまつてゐるのである。

尊の教えを正しく理解し、正しく行ふことが真理に到達出来る唯一の方法である。

私達は釈尊から淨土への道として正觀と念仏の二つを教えられてゐるが、この点をよく理解し、常に仏法を正しく学び、正しく行なつて貴重な人生を有意義に過したいと思う。

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 配 所 へ の 旅 —

高 橋 良 和

さしえ 小 林 健 造



さくらにはまだ早い三月の半の頃であった。

肌寒い京の町をあとに、輿をかつぐ六十余人の弟子たちの行列は、しづかに京都をあとにしたのである。

柳の芽もあと数日で青くふくらむ加茂川の堤をすすむ行列の足は重いようであった。

ところがこの配流のことで一つだけうれしいことがあったのである。というのは、土佐の国に流しものになる筈のところ、上人の帰依者である九条兼実公のはからいで、

土佐の国とはあまりにも遠い、この御老体の法然上人をそこまで流罪してはまことにお気の毒である、それで自分のおさめる土地である讃岐の国に行っていたきたい。というしらせがあった。

土佐と讃岐とはかなり地域が異なって、讃岐の方が京都

にも近く、その上土地がらもよいということであったようである。

行列は加茂川堤をずーっとくだって鳥羽のあたりから川船に乗ることになり、静かに輿からおりた法然上人は送る人たちのなかを合掌しながら小さな声でのお念仏がつづいた。

上人さま、お元気で。

上人さま、お達者で。

群衆の声は上人の耳もとにひびいた。

お別れでございます。

成阿弥陀仏（じょうあみだぶつ）というお弟子がそういうと、堤の上から声らかなお念仏がつづいた。

そうして船は乗り場をはなれていったが、物見遊山のとくなら、まるで絵のような景色だったであろうが、はるか見知



らぬ讃岐の国に赴くこの一行の姿は心なしか淋しく、つきそ
う人々はひたすら上人の御無事を祈るより仕方がなかったの
である。

淀川に入ると河巾はひろくなった。

千石船の行き通う枚方をすぎると、市の山もかすんで見え
た。

上人さま、吉水の庵室もあすこに。

京の町はいつ見てもいい景色だが、讃岐の国に赴いて知ら
ぬ人々にお念仏をすすめるのはまたたのしみである。

法然上人はたんたんとしてこの配流を苦にせず、終始お念
仏のかすかな声が船のなかに流れていたのである。

枚方をすぎると大阪はもう近い。

河の流れはゆうゆうとして、大河のかたちになって大阪湾
にそそいでいるが、やがて船は大阪湾に入ったのである。

大阪でございます。いよいよこれから瀬戸の海に入ります。
す。

そうか、まだしばらくはかかるのう。

はい。

瀬戸の海に入ると波もなく、まことにおだやかであった。

このあたりに摂津の国（せつのくに）といって、海に面し
た村々は漁を職業として生活している人が多いが、ちょうど

高砂のあたりにきたときである。

ここは高砂の松といって枝ぶりのよい松が海原に生えていて、風光明媚なところがあるが、長い道中のこと、せめてもこのあたりに船を寄せてやすむことになった。

上人さま、少しやすんでまいりましょう。

弟子のことばで、上人はこの高砂の松のあたりでやすんだのである。

このとき、とつぜん、六、七十才の男女の老人が上人の姿をみると、前にすすんできたのである。

もしや、あなたさまは、都でお念仏をひろめられる法然上人さまではございませんか。

このお方が法然上人である。

と成阿弥陀仏がいうと、涙を流して上人の衣の袖にとりすがった。

おねがい申しあげます、わたしたちはこのあたりで漁をしておりますものでございますが、毎日魚のいのちを絶っておりますので、死ねば必ず地獄におちると思いますが、なんとかお救いくださいる道はございませんか。

血相を変えてたずねた。

おねがい申します。お救いくださいませ。

あつまった老人の男女が膝をすりよせて、上人の前に頭

をさげたのである。あなたがたは心配しなくてもよろしい。やさしい上人のことばはほんとうに静かにおちついた口もとから出たのであった。

なにも心配しなくてもよい、ただひたすらにお念仏をすることである。そうすれば必ず未来は救われて、浄土に生れることが出来る。

ありがとうございます。あつまった人々は合掌すると、わたくしといっしょにお念仏をしよう。

法然上人のことばで、みんなは大きな声でお念仏をしたのである。高砂の松に風く春の風のように、心もちがもちついたのか、あつまった老人の顔によりこびの色があらわれていたようであった。休憩もすんで船はやがて、また瀬戸の海に出ていったが、そうしてまたこの一行は室（むろ）というところで、いやしい職をしている遊女にも化導したのである。あなたも自らの心をいやしむ必要はない、仏さまはきっとあなたを救ってくださいるにちがいないから、お念仏を申すことである。と、さとしたのである。

道中いろいろなことがあった。然し上人は少しのつかれもなく、いよいよ讃岐の国につくことになるが、讃岐の国の入口である高松に船がついて、それから子松村がその配所となっているので、ここに赴くことになるのである。

求道・伝道の盲目者

鑑 真

唐招提寺藏（乾漆造）



招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十余度の難をしのぎたまひ、御目のうち塩風吹入て、終に御目盲させたまふ。尊像を拝して

若葉して御目の雪ぬぐはばや　△芭蕉▽

なんのため盲目になってまでも、へんびな日本を訪れなければならなかったのであろうか。一度ならず、二度三度、ときには海南島まで漂着して渡海しようとしている。決意したのが五十五歳、国禁を犯してまでも渡海の志は変わらず、第五回目の失敗の途中、六十三歳で失明しても、まだ挫折の気持ちを抱いてはおられない。六度目、ついに失明のまま六十六歳も終わろうとするとき、沖繩から島伝いに鹿児島島の南端に着き、太宰府に導き入れられたのである。五回の失敗は失敗ではなかった。どこを旅しても、律を講じ、戒を伝え、仏像を造り、寺を建立する教化をやめることがなかったからである。いうならば日本に戒を伝えようというだけの志ではなかった。鑑真を動かしたのは求道の一念にほかならない。いや、鑑真の背後にあるみほとけが鑑真を動かしたともいえるのか。まさに「不惜身命」とはこういうすがたであろうか。それにしてもすばらしい像である。この像はいろいろなことをしみじみと教えている。

昭和十年五月廿五日 第三十三卷 第三十三号
昭和四十二年四月二十五日 印刷

(毎月一回一日発行)
十二年五月一日発行

浄土

第三十三卷

第五号

定価金六拾円(送料六円)

真野正順著

新刊 日本人の信仰と生活

B 6 判 356P
価 700 円 770 円

昭和のはじめの国家主義の嵐のなかにあつて真の日本人の在り方を示すため、仏教的ヒューマニズムをおしすすめ、また戦後の混乱期において、新しい日本人の精神生活に礎をあたえた筆者の、仏教者としての信仰と人生観のあふれる遺稿のかずかずをまとめた珠玉の随想録

内 容

- 第1章 香を焚く
第2章 生活を強く美しく
第3章 先聖行ける道 附 真野先生を偲びて

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋1-11-6 振替東京 82187

大正大学教授 竹中 信 常 著
文 博

日本人と仏教

定 価 600 円
770 円

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教えと信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯である

教育新潮社発行

希望者は本会へ申込み下さい

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十二年四月二十五日 印刷

昭和四十二年五月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番